【コメント】汎用的スキルの重要性と学修歴社会に向けて

一般社団法人　日本経済団体連合会
教育・自然保護本部長
酒向 理枝（さこう りえ）

◆重要度を増す「汎用的スキル」の位置づけと課題

今回の調査では、企業が採用において思考力や問題解決力といった「汎用的スキル」を重視していることが、改めて示されました。こうした汎用的スキルの重要性は、これまで産学で対話を重ねてきた中で指摘されてきた方向性と一致しており、企業と大学の認識が同じ方向を向きつつあることが、結果として明らかになった点は大きな前進と評価できます。産学双方が、これからの社会で求められる力について共通理解を持ち始めていることは、学生のキャリア形成を後押しするうえで、極めて重要な基盤となります。

一方で、企業側は学生の汎用的スキルについて「改善の余地がある」と感じていることも示されました。これは、初等中等教育から高等教育までの学びの設計や、産学の接点の在り方といった構造的な要素にも起因することが考えられます。文理融合教育や、STEAM 教育、リベラルアーツ教育を推進して、幅広い知識に基づく俯瞰力や論理的思考力、数理的推論力、構想力等を涵養することが期待されます。
また、産学が協力しながら、学生が多様な学びに触れ、考えを深められる環境を整えていくことが重要です。たとえば、課題解決型学習や探究活動をはじめ、社会との接点を意識した学びを充実させることは、汎用的スキルの育成に有効です。産学が対話し、互いの期待や役割を共有しながら取り組みを進めることで、学生の学びはさらに豊かになります。

◆「学修歴社会」に向けた、企業の現在地

次に、「学修歴社会」に向けた企業の現在地について述べたいと思います。学修歴は、個人が生涯にわたって「何を学び、どのような知識・スキルを身につけてきたか」を体系的に示す学びの履歴です。学校の成績や学位といった学歴に加え、マイクロクレデンシャル、オンライン講座、就業経験を通じたスキル習得など、多様な学びを証明する情報を含みます。働き手も「人生 100 年時代」の到来による職業人生の長期化を見据え、自らのキャリア形成に主体的に取り組むことが求められます。産業構造の変化や人生 100 年時代を見据えると、何を、どこで、どのように、人生のいつの時点で学ぶべきかを、個人が主体的に決められるようにすることが望ましいと思います。また、技術進歩が著しく、複雑化する社会にお

いては、身に付けた知識・スキルが陳腐化しやすいため、自身のキャリアに合わせて絶えず学び直す必要があります。真の生涯学習社会の実現には、学歴社会から学修歴社会へのマインドチェンジが不可欠であり、社会全体で機運を醸成すべきだと考えます。こうした点について、経団連の提言「2040 年を見据えた教育改革」（25 年 2 月公表）で指摘しています。

◆これからの新卒採用で企業と大学に求められること

最後に、これからの新卒採用において企業と大学に求められることを述べます。新卒採用におけるミスマッチを減らし、学生が自分に合った進路を選択できるようにするためには、学生が就職活動の直前になって初めてキャリアを意識するのではなく、早い段階から将来について考え、入学後も主体的に学びを選択していく姿勢が重要です。こうした姿勢を育むには、大学だけでなく、小中高からの継続的なキャリア教育が不可欠です。

さらに、大学までのキャリア教育を経た後も、働き始めてから自主的に学び続け、自律的にキャリアを形成していくことは、社会人としての着実な成長にも寄与します。学生には、キャリアオーナーシップを持って学びを選択していく姿勢を期待します。自らのキャリアを主体的に築いていくという姿勢は、大学と企業の双方に共通する重要課題であり、その実現には両者の協働が重要です。

企業には、学生が職業観を深め、仕事を多面的に理解するための機会の提供に積極的に関わることが求められます。加えて、学生が自らの選択のもとに大学までで学んだ内容を丁寧に受け止め、評価することが、これからの採用の鍵となります。

一方、大学には、キャリア教育を含め、学生の学びがより社会とつながるような取り組みを引き続き進めていただくとともに、学生が自らの学びを言語化し、学修のプロセスや得られた知識・能力を明確に表現できるよう後押しする取り組みを少しずつ広げていただきたいと考えています。産学が力を合わせて学生の成長を支え、多様なキャリア形成を後押しすることが、これからの社会で活躍する人材育成につながると確信しています。

（2025 年 11 月 21 日）